

## タイ語の *cuŋ* を含む因果関係表現とその日本語対訳の対照研究

### A contrastive study on Thai *cuŋ* constructions and their translations into Japanese

高橋清子

TAKAHASHI, Kiyoko

(チュラロンコン大学大学院)

**Abstract:** This paper investigates the nature of the ideational function word *cuŋ* 'consequently' and *cuŋ* constructions in Thai. The analysis of the data, which are derived from the National Language Research Institute's bilingual corpus in Japanese and Thai, suggests that the cognitive model for a schematic causal link between two propositions represented by serial clauses in a *cuŋ* construction is compatible with temporal, conditional and purpose relations as well as both realis and irrealis modes, and that the speaker's inference should be involved in establishing the causal link.

**キーワード:** タイ語の *cuŋ* 構文, 認知モデル, 図式的因果関係, 概念形成機能, 連節

**Key words:** Thai *cuŋ* construction, cognitive model, schematic causal link, ideational function, clause linkage.

#### 1. 考察の目的と範囲

本稿は国立国語研究所が作成した「日本語とアジア諸言語との作文対訳コーパス：日本語学習者による作文とその母国語訳との対訳データベース ver.1 (試用版)」[注1]の中に含まれているタイ人学生による日本語とタイ語の作文対訳を用いて、先行節と後続節で表される命題事象の因果関係を表す *cuŋ* [注2] というタイ語の機能語の意味を考察する。対訳コーパスをタイ語に関する言語学研究的の道具として活用してみようという試みである。[注3]

原因/理由を表す節を「原因節」、結果/帰結を表す節を「結果節」と呼ぶことにすると、両節の統語的配列は「原因節+結果節」の場合もあれば「結果節+原因節」の場合もある。例えば、原因が大雨が降ったことでその結果が交通渋滞になったこととすれば、「原因節+結果節」の形で(1)とも言えるし、「結果節+原因節」の形で(2)とも言える。本稿では(1)のような「原因節+結果節」の形で「結果節」の述語成分の前（主題成分があればその後）に *cuŋ* が現れる表現を考察する。

(1) fǒn tòk nàk rôt cuŋ tít

雨 落ちる 重い 車 くつつく

大雨が降った (原因)、だから交通渋滞になった (結果)

(2) rôt tít núaŋ càak fǒn tòk nàk

車 くつつく ~により 雨 落ちる 重い

交通渋滞になった (結果)、大雨が降ったから (原因)

ある言語形式の意味を考察しようとするとき、その言語の中でその形式がどのように用いられどのような意味を表すのかを網羅し尽くすことができればそれで十分かもしれないが、もしその形式のさまざまな用法が他言語ではどのように表現されるのかを比較検討することができればその意味の体系をよ

り明確に説明することができる。他言語の概念や論理を持ち込むことで、別の視点からあるいは異なる原理によってその形式の意味を記述することが可能となるからである。そこで本稿は対訳コーパスを利用して、タイ語の **cuɯŋ** を含む表現とその日本語の対応部分を照合し、**cuɯŋ** の意味体系についての明示的説明を試みる。しかし注意しなければならないのは、同コーパスの対訳は単純な比較対照を許さないということである。なぜなら同コーパスに納められた日本語学習者の日本語作文には不適切な表現が少なからず含まれているからである。したがって同コーパスを利用して対照言語研究を行う際には十全の慎重が必要である。だが翻って、対訳に見られる不整合が何に起因するのかを積極的に考えることで、その対照言語間の示差的性格を読み取ることが可能となる。

何語話者であれ我々人間は、外界で次々と起こる事象を把握しようとするとき、これまでの経験や知識からそれらを意味づけ関係づけようとする。そうした人間の主体的な事象解釈に、その事象間の関連性が立ち現れ、因果関係が形作られるとよい。だから事象間の因果関係は人間の認識の内に存するものであり、人間の認識作用を離れては存在し得ないものである。Givón (1990: 834-835) が指摘するように、**reasons** (**internal motivations** を伴う理由) は **causes** (**external motivations** を伴う原因) を包含する概念であり、話者が関連性を認めれば何でも **reasons** になり得る。因果関係の有無は我々の認識如何にかかっている。「現在の状況（結果）がそれに先行する状況（原因）に結び付いている」という因果関係の図式は、我々の経験によって構築され、さらに我々が新たな事象を解釈し理解する際の「認知モデル」(cf. G. Lakoff 1987) として活用されるものである。「先行事象（物理的前提）とその結果」という時間軸にそって生起する事象の継起関係（命題寄りの把握）であろうが、「理由や条件（論理的前提）とその帰結」という論理の流れにそった因果関係（認識者寄りの把握）であろうが、我々はそれらを認知モデルとしての因果関係の図式にあてはめて理解していることに変わりはない。因果関係の図式を先のように抽象的に設定することで、**cuɯŋ** の機能は我々の因果関係の把握（当該の事象を既存の事象とのつながりの中でその結果として把握する）という認識作用を言語的に標示することである、という一般化した特徴付けが可能となる。**cuɯŋ** の機能をそのように大きく特徴付けた上で、**cuɯŋ** の意味機能を明確にすることが本稿の主たる目的である。

第 2 節以降の内容構成は以下の通りである。第 2 節では分析の手順を大まかに説明する。第 3 節では先行研究を要約する。第 4 節では分析結果を記述する。そして第 5 節で結論を述べる。

## 2. 分析の手順

対訳コーパスに納められたタイ人学生 101 人の日本語作文のタイ人学生自身によるタイ語訳 (th001m.txt~th101m.txt) から、コンピュータの検索機能を使って、**cuɯŋ** を含む表現をすべて拾い出した。そして日本語作文 (th001j.txt~th101j.txt) のほうの対応部分も拾い出した。両者を対照した上で、**cuɯŋ** の用法を分類し、その対訳パターンを分析した。

## 3. 先行研究

この節は 3 つの小節に分かれる。(3.1) ではこれまで **cuɯŋ** の意味がどのように記述されてきたのかを概観し、それについての筆者の意見を述べる。(3.2) では **cuɯŋ** で結び付けられる二つの節の接続関係について掘り下げる。(3.3) では **cuɯŋ** に対応する日本語の形式についての先行研究を簡単に紹介する。

### 3.1.1. *cuŋ* の意味記述

Ishii et al. (1989) はスコータイ時代 (13~14 世紀) の石碑に刻まれた語彙の索引である。どの語がどの石碑の何面、何行目に用いられているかを同索引で調べることができる。石碑に刻まれた文章は引用されていないが、見出しとして掲げられている各語には簡単な英語訳がつけられている。Ishii et al. (1989: 38-39) によると、スコータイ時代の石碑に刻まれた *cuŋ* および *cuŋ* [注4] は「then, therefore」という副詞の意味を持つ。13-14 世紀の時代から *cuŋ* および *cuŋ* は時間的継起関係 (then) あるいは論理的因果関係 (therefore) を表す語として用いられていたということになる。しかしタイ学士院が 1982 年に発行したタイ語辞書では *cuŋ* および *cuŋ* は英語の therefore のように積極的に論理的因果関係を表す形式であるとは説明されていない。また、同辞書は *cuŋ* および *cuŋ* を副詞ではなく接続詞であるとしている。*cuŋ* が接続 (助) 詞であるのか、副詞であるのか、はたまた違う品詞であるのか、本稿では追及しない。代案としては Halliday and Hasan (1976) の分類が挙げられる。Halliday and Hasan はテクストの結束性 (cohesion) の観点から and, so, then, accordingly, therefore, nevertheless, on the contrary, as a result of that (等位接続詞、単純副詞、複合副詞、前置詞句、前置詞表現) といった雑多な接続形式を 1 つにまとめて conjunctive adjunct (接続付加詞) というカテゴリーを立てた。

Bradley (1873) は 19 世紀に編纂されたタイ語辞書である。同辞書には *cuŋ* の語形はなく *cuŋ* の語形のほうだけが見出し語として掲載されている。Bradley (1873: 143) は *cuŋ* は *kô* と同義であると述べるにとどまり、(3) のような例文を挙げている。[注5]

- (3)a.    *khraŋ*            *thuŋ*    *cuŋ*    *wây*    *phrá?*  
           ～ときに            着く                            拝む    仏  
           着いたら仏を拝む
- b.    *thân*    *hây*    *maa*    *raw*    *cuŋ*    *khâw*    *maa*  
           あの方    使役    来る    我々                            入る    来る  
           あの方が呼んだ、それで我々は入った
- c.    *câw*    *tham*    *phît*                            *raw*    *cuŋ*    *wâa*  
           領主    行方    間違った                            我々                            責める  
           領主が間違った行いをしたので我々は責めた

しかし、Bradley (1873) には残念ながら *kô* の見出しがなく、当時の *kô* の意味を確認することができない。現代タイ語の *kô* については、富田 (1990: 45) が「明示された、または既知の仮定または条件を受けて主節を導く；主節の主語の後に置く」と説明し、「それで、したがって、それでも；なお、やはり；～もまた；じゃあ；だって～；つまり～」という日本語訳を与えている。「じゃあ；だって～」などの訳からも伺えるように、現代タイ語の *kô* は文頭に置かれ聞き手を念頭に置いた話し手の命題に対する態度も表す。述語成分を従えることなく間投助詞のように用いられることもある。

Traugott (1982, 1988, 1989) によれば、言語表現の意味は命題関係 (propositional) からテキスト連結関係 (textual) へ、さらに対話者間関係 (expressive) へと主観性の増す方向に変化する。そうした意味変化は、抽象的な意味領域が具象的な意味領域に投射されるメタファーや、語用論的強化というある種のメトニミーによってもたらされる。メタファーの例としては、具象的な空間関係から時間関係

やテキスト連結関係への意味拡張が挙げられる。例えば、Traugott (1988: 409) によると、もともと空間関係を表す前置詞であった *after* は時間関係を表す前置詞としても使われるようになり、さらにテキスト連結関係を表す接続詞になった。一方「語用論的強化」とは、その表現がある状況で実際に使用されるときに話し手、聞き手が言外の意味として解釈していたものが次第に強化されその表現の意味として定着していく過程である。例えば、Traugott (1988: 407) によると、*while* はもともと *at time* という意味の副詞だったが、テキスト連結関係の意味が強化されて時間関係を表す接続詞になり、さらに対話者間関係の意味が強化されて譲歩の意味を持つようになった。タイ語の *kô* も同様の動機付けによって対話者間関係の意味が強化され話し手の命題に対する態度を表すようになったのだろう。このように対話者間関係の意味を派生させている *kô* に対し、*cuŋ* は対話者間関係の意味を表さない。*cuŋ* は *then, so, therefore* といった英語の因果関係を表す接続付加詞ともこの点で異なる。Halliday and Hasan (1976: 240-241) によると、接続表現の多くは「外的」(external, experiential, referential, cognitive) な接続関係と「内的」(internal, interpersonal, socio-expressive, social) な接続関係の両方を表すという。(4) は Halliday and Hasan が挙げた *so* 「だから」を含む因果関係表現の例である。(4a) は外的因果関係 (述べられている 2 つの現象間に存在する因果関係) を表し、(4b) は内的因果関係 (談話構成の中の、コミュニケーションの過程での因果関係) を表す。[注 6]

- (4)a. She was never really happy here. So she's leaving.  
彼女はここでは真に幸福なことは 1 度もなかった。だから出て行くのだ。
- b. She'll be better off in a new place. ---So, she's leaving?  
彼女は別の土地へ移ったほうがうまくいくだろうよ。  
じゃあ、ここを出ていくの？

*kô* は英語の *so* などの接続付加詞と同様、内的 (対人关系的) 接続関係の意味を表すことがあるが、*cuŋ* はそのような意味を表すことができない。

また、Traugott and König (1991) が *since* の意味について分析した仕方では *cuŋ* の意味を説明するのは妥当ではないだろう。Traugott and König (1991: 194) によると、*since* はもともと *from the time that* という時間関係を表していたが、(5a)~(5c) のような意味拡張の過程を経て、論理的因果関係をも表すようになったと考えられる。[注 7]

- (5)a. I have done quite a bit of writing since we last met.  
この前会って以来かなり書きましたよ (時間関係)
- b. Since Susan left him, John has been very miserable.  
スーザンと別れてから、ジョンは悲惨である (時間関係)  
スーザンと別れたので、ジョンは悲惨である (因果関係)
- c. Since you are not coming with me, I will have to go alone.  
あなたが一緒に来てくれないから、私は一人で行かないといけない (因果関係)

*cuŋ* は話者の因果関係の把握 (当該の事象を既存の事象とのつながりの中でその結果として把握する

こと) を標示する機能を持つと筆者は考える。cuwŋが関与する時間的継起関係や論理的因果関係は「現在の状況(結果)がそれに先行する状況(原因)に結び付いている」という因果関係の図式が「時間領域」や「論理領域」といった異なる意味領域で具現したものとして捉えることができる。どちらかの意味からどちらかの意味が派生したわけではない。cuwŋは、否定辞(not)や等位接続詞(and, but, or)などと同様、「語用論的曖昧性(両義性)」(cf. Horn 1985)を持つ語である。つまり、抽象的な意味を持ち、その解釈は文脈に即して適宜なされる。したがって、方向性を持つ意味拡張を経て多義化したsinceのような多義語の意味構造(意味の派生関係)をそうした語用論的曖昧性を持つ語の意味にあてはめることはできない(cf. Sweetser 1986, Michaelis 1994)。

Noss (1964: 180-183) はcuwŋにkô, læøy, thũŋ, janを加えた五つの接続語をグループとし、これらの接続語は共通して「先行文との時間的あるいは論理的関係、あるいは出来事の時間的連続性、予測性、非予測性を表す」と説明している。そして、Bradley (1873) の説明とは異なり、cuwŋはthũŋと同義であるとし、両者に「subsequently, only then, it comes to the point that」という英語訳を与えている。(6)は Noss の挙げた例文である。[注8]

- (6)      rəw      ʔiik sák khrûu      léəw                      cuwŋ      khôy      pay  
            wait      a little longer      PERFECT                      then      go  
            Wait a moment longer, and (only) then go

cuwŋとthũŋが同じ意味を持つという考えはあながち間違っていないだろう。例えば、宮本 (1997: 35) も、意志を表すcàʔがcuwŋあるいはthũŋに後続したcuwŋ càʔおよびthũŋ càʔという2つの形式はどちらも「～したからやっとな...、～してそれで...、～してそれでやっとな...」という結果の意味を表すと説明している。ただしthũŋ càʔの方がより口語的だという。

いずれにせよthũŋは典型的な多義語である。thũŋという音形に複数の関連した意味が結び付いており、そのうちの1つがcuwŋの意味に対応するに過ぎない。富田 (1990: 773-775) はthũŋに次のような日本語訳を与えている。「(目標に) 到達する、着く; 及ぶ、～のことを; 逢着する、会う; 敬い奉る、帰依する; 等しい、肩をならべる; 十分に多い; ～へ、～まで; ～ほどまでも; (目下の人に出す手紙につける) ～へ; たとい～であっても; ～さえも; (=cuwŋ) ～してそれで、～してそれでやっとな」。最後の意味項目「～してそれで、～してそれでやっとな」がcuwŋの意味に重なる部分である。先述のとおり、多義語の意味の派生には方向性があり、富田の日本語訳の配列はその方向性を多少なりとも反映しているといえるだろう。多義化の方向は完全に予測することはできないが、後から合理的に説明することはできる。つまり、多義語が持つ意味は我々の解釈によって動機付けられ有契的につながっているものである以上、その語の意味拡張をその我々の動機付けとの関連で説明することができる(cf. G. Lakoff 1987)。thũŋの意味拡張もメタファーや語用論的強化などによって合理的に説明できるはずである。ここでthũŋの多義構造を詳しく考察する余裕はないが、確認しておきたいのは、thũŋはそうした意味拡張の過程を経てcuwŋの意味範囲と重なる部分を持つに至ったと考えられることである。一方、cuwŋは図式的な因果関係という抽象的ではあるが単一の意味を持ち続けていると筆者は考える。

cuwŋを含む表現の意味は、所与の文脈がなければ、曖昧だ。例えば(9)の例なども、もし文脈が与えられなければ、継起する出来事についての経験を客観的に描写した表現であるとも、話者による何らかの



「parataxis」は nucleus と呼ばれる自立度の高い終止形の節 (あるいは文) が並んだものである。それらの二つの節は語用論的にしか関連づけられない。例えば、You keep smoking those cigarettes, you're gonna start coughing again. など。「hypotaxis」は margin と呼ばれる比較的自立度の低い非終止形の節と nucleus が結び付けられたものである。両者は相互依存関係にあるが、構造的埋め込みの関係にはない。例えば、If you keep smoking those cigarettes, you're going to start coughing again. など。「subordination」は、一方が完全にもう一方に埋め込まれた関係である。例えば、That the Titanic sank was unexpected. など。左の極に位置する parataxis の 2 つの節は融合度が最も低く、その文法的接続形式の存在は最も希薄である。一方、右の極に位置する subordination の 2 つの節は融合度が最も高く、その文法的接続形式の存在は最も顕著である。

タイ語の cuŋ は後行節の述語成分の前 (主題成分があればその後) に生起し、先行節と後続節双方の自立度を損なうことなく (つまりどちらも margin に格下げされることなく nucleus としての体裁を保ちながら) その相互依存関係をマークする機能を持つ。したがって cuŋ によって表される関係は、nucleus (N) が並立する parataxis (N+N) でもなければ、自立できない margin (M) を含む hypotaxis (M+N) でもない parataxis と hypotaxis の中間の関係であるといえるだろう。R. Lakoff (1984: 487) も parataxis と hypotaxis の中間に位置する mixed type (mixotaxis) があると指摘しているが、それは等位接続詞 and を含む The baby cried, and the mother picked it up. のようなタイプである。しかしタイ語では、等位接続詞 lé? 「そして」を含む (11a) と cuŋ を含む (11b) は意味が異なる。

- (11)a. kháw tham dii lé? lòn dâi dii  
彼 する よい そして 彼女 得る よい  
彼はよい行いをした、そして彼女はよいことがあった
- b. kháw tham dii lòn cuŋ dâi dii  
彼 する よい 彼女 得る よい  
彼はよい行いをした、それで彼女はよいことがあった

等位接続詞は節と節の間に置かれそれらをただ単に同等のレベルで付加的につなげるだけである。一方、cuŋ は節と節を因果関係で結ぶ。言い換えれば、等位接続詞で結び付けられた 2 つの節は意味的に対称だが、cuŋ で結び付けられた 2 つの節は意味的に非対称である。もし (11a) のような等位接続詞で結ばれた節と節の間に因果関係が感じられることがあるとすれば、それは等位接続詞自体の意味ではなく、等位接続詞の語用論的曖昧性を背景とした会話者の推量によるものである (cf. Grice 1978, Horn 1985)。一方、cuŋ は後続節の述語成分の前に置かれ先行節と後続節との間に因果関係が存在すること (後続節で表される事態や判断の背景には先行節で表される先行事態や既存の知識があること) を積極的に、しかしその因果関係の種類は不特定のまま、標示する言語形式である。cuŋ は具体性にかける図式的な因果関係を想起させるだけとはいえ、等位接続詞よりは明示的に因果関係を持つものとして 2 つの節を結び付ける働きを持つといえよう。したがって、cuŋ で結び付けられた 2 つの節は、等位接続詞で結び付けられた 2 つの節よりは相互依存度が高い (+ dependent)。

節接続タイプの連続性は下の表 1 のようにまとめられるのではないかと思う。

Parataxis	> Conj.-linkage	> <u>cuŋ</u> -linkage	> Hypotaxis	> Subordination
N + N	N + and + N	N + N including <u>cuŋ</u>	M + N	
- dependent	- dependent	+ dependent	+ dependent	+ dependent
- link-marking	+ link-marking	(schematic causal link)	(more specific link)	
- embedded	- embedded	- embedded	- embedded	+ embedded

independence <-----> dependence

表 1：節接続タイプの連続性

parataxis と hypotaxis の間に位置する等位接続 (conj.-linkage) と cuŋ 接続 (cuŋ-linkage) という 2 つのサブタイプの違いは、図式的な因果関係を言語形式の意味として表せるかどうか、という点にある。parataxis や等位接続は、Levinson (1978: 97) が言うところの conversational implicature として因果関係を含意することはあっても、cuŋ 接続のようにその形式自体の意味として因果関係を表すわけではない。

なお、cuŋ 接続や hypotaxis のようにつながられる節が依存関係は持つが階層的支配関係は持たず (+ dependent、- embedded)、なおかつ parataxis や等位接続のようにいくつにもつながった節連鎖が可能な接続関係がある。Van Valin (1984) はそれを Olson (1981) に倣い cosubordination と呼んでいる。[注 1 3] 世界の多くの言語が cosubordination の接続形式を持つという。[注 1 4] 一方、タイ語の cuŋ を使ってそのようにいくつにもつながった節連鎖をつくることは不可能だ。なぜなら cuŋ は原因と結果というあくまでも 2 項対立の関係に立つ結果をマークする形式だからである。

### 3.3. 日本語の対応形式

対訳コーパスの日本語作文の中で cuŋ に対応するものとして使われていた日本語の接続形式は「動詞の連用形、～て、～ので、～から、それで、だから」である。しかし、次節で詳しく述べるが、こうした接続形式を使うことなく原因と結果を単に並列させている場合もある。また、原因・理由、時・前後関係、条件・仮定、目的を表す接続形式（例えば、daŋnán、dúay hèt níi、phró?chanán 「だから、そういうわけで、それゆえ、そのため」、phró?~、phró? wâa~、núay càak~ 「～ゆえ、～ので、～から」、lǎŋ càak nán 「その後」、lǎŋ càak~ 「～してから、～後」、phɔɔ~ 「～するとき、～すると」、thâa~ 「～れば、～たら」、phúá~ 「～ために、～ように」など）と cuŋ は共起することが多い。その場合には、それらの接続形式の意味に対応する日本語の接続形式が対訳に使われる。

次節で cuŋ を含む表現と日本語作文の中の対応部分を対照分析する際の基礎知識とすべく、日本語作文の中で使われていた非独立接続形式およびそれらに関連する形式「～て」、「～から、～ので」、「～と」、「～れば、～なら、～たら、～と」、「～ために、～ように」に関する先行研究を以下に要約する。

「～て」

Hasegawa (1996: 217-219) はテが表す意味関係を以下のようにいくつかに分類した。

REASON	ジョンが試験に受かって私はとても嬉しい。
INTEND:	
LOCATIVE	ジョンがノードストロームへ行つて靴を勝ったこと。
MEANS-END	火にかざして水を蒸発させた。
MATERIAL	ジョンが煉瓦を使つて家を建てたこと。
MANNER	ジョンが赤い服を着てお葬式に来たこと。
MEASURE	三日かけて仕上げたこと。
CAUSE-EFFECT	友達をいじめて先生に叱られた。
CONTRASTIVE	まきは合格してひろは不合格だった。
SETTING	明治に入つて羽布団の業者があほうどりを撲殺した。

このうち *cuwŋ* が表すことができるのは因果関係が関与する REASON (理由)、CAUSE-EFFECT (原因・結果)、SETTING (状況) の意味関係である。対訳コーパスには CAUSE-EFFECT をあらわすために *te* が使われている例があった (畑を作ることができなくて餓死に至る恐れがある (th077j))。時間的継起関係を表すために使われていた *te* もあったが、それは *te* カラとしたほうが適切な訳であると思われる (川の神様に祈つて (カラ) グラトンを川に流す (th064j))。Hasegawa (1996: 23) によると、TEMPORAL SEQUENCE (時間的継起) は *te* が本来的に表す意味ではない。

「～から、～ので」

理由を表すカラとノデの意味の違いについては、永野 (1951、寺村 1988: 46) の以下のような観察がある。カラで結び付けられた前件と後件は、話し手の主観によって原因結果や理由帰結の関係で結び付けられる。後件に関する理由や根拠を主観的に説明するときにはカラが使われる。一方、事柄のうちに因果関係に立つ前件・後件が含まれていて、それをありのままに客観的に描写するときはノデが使われる。森田 (1980: 110-112) はカラとノデの使用制約について次のように述べている。まだ確定していない事柄や話し手の推量や意志、願望、依頼など主観的判断による叙述が来る場合はカラを用いなければならない。例えば、「すぐ来るでしょうカラ (\*ノデ) しばらくお待ちになってはいかがですか」、「私もすぐ行くカラ (\*ノデ) あっちで待っていてください」など。カラを導く条件句は主観の認定ゆえ、確実性に乏しい場合でもこれを条件化することができる。例えば、「～だろうカラ」、「～まいカラ」、「～たいカラ」など。またカラによって導かれる結果の句も主観の認定によって成立し得るため、「～カラ～しろ」、「～カラ～しなさい」、「～カラ～してほしい」などの命令や依頼・推量・意志・質問など、まだその事柄が実現していない場合も可能である。逆に、すでに実現してしまった過去や完了の事柄はカラの結果句とはなりにくい。カラは本来別個のものである二つの事柄を話し手が順々に認識し、それを理由・結果の関係として主観的に結び付ける形式であるからだ。一方、ノデは確実な因果関係を客観的にとらえ叙述する条件形式だから不確かなことや話し手の心の状態は現れにくい。

*cuwŋ* を含む表現の日本語作文の対応部分の原因節には理由を表すカラ、ノデがよく用いられていた。

「～と」

坪本 (1993: 99-130) は *to* が表す意味を以下のように三つに分類した。

- (1) 継起的な時 e.g. 飛行機は滑走路に出ると、勢いよく走っていった。  
(2) 条件 e.g. 窓を開けたまま寝ると、風邪をひくよ。  
(3) 発話行為のモダリティ e.g. 本当のことを言うと、一時半には東京に帰っていた。

(1) は二つの出来事が生じたままを描写しているものであり、そこに話し手の思考や判断などが介入する余地はない（継起的接続）。(2) には話し手の心的世界の中での論理的関係付け、すなわち前提と帰結の関係、が介入している（意味論的接続）。(3) は論理的関係付けというよりも、話し手の発話の観点や態度を述べている（語用論的接続）。坪本は、Sweetser (1990) と Haiman (1978, 1985) の理論に依りながら、(1) はことながら関係の領域に属する用法、(2) は認知的領域に属する用法、(3) は発話行為の領域に属する用法であり、より具体的な (1) の領域をより抽象的な (2) と (3) の領域に関係づける認知プロセスとして先行節の背景化（時系列からの逸脱、つまり前節を「地（背景）」、後節を「図（前景）」として捉えること）が認められるとする。

**cuwj**には (3) 発話行為のモダリティを表す用法はないが、(1) 継起的な時と (2) 条件に関係した用法はある。すなわち、**cuwj**の意味領域は、ことながら関係の領域と認知的領域にまたがるが、発話行為の領域には及んでいないということになる。Halliday and Hasan (1976) の用語を使えば、**cuwj**は概念形成的 (ideational) 機能を持つが、対人関係的 (interpersonal) 機能は持たない。

「～れば、～なら、～たら、～と」

益岡 (1997: 60) は条件を表すレバ、タラ、ナラ、トについて以下のように説明している。レバは時間を越えて成り立つ一般的な因果関係（論理的帰結）を表す。タラは個別的事態間の依存関係（偶然の結果）を表す。ナラはある事態を真であると仮定し、後件で表現者の判断や態度を述べる。トは前件と後件で表される二つの事態の一体性（自然的帰結）を表す。

**cuwj**は条件表現の結果節に用いられることがある。対訳コーパスの中の**cuwj**を含む条件表現の日本語作文対応部分にはタラが用いられていた（正しく揃ってイタラ式が続く (th034j)）。

「～ために、～ように」

バンチョンマニー (1999: 118, 125) によると、目的節の内容の実現が主節主語の意志でコントロールできない場合にはタメニではなくヨウニが用いられる。しかし、タメニとヨウニの使い分けの条件は、単なる主節主語の意志性の問題を越えて、主節と目的節の結び付き方（緊密度）が関係しているのではないかとバンチョンマニーは述べる。つまり、主節の表す事柄の実現に直接的に結び付くと判断される時はタメニが使われ、直接的に結び付くものではないと判断される時はヨウニが使われる。

**cuwj**は目的表現の結果節に用いられることがある。対訳コーパスにあった**cuwj**を含む目的表現の日本語作文対応部分ではヨウニが使われていたが（古くて美しい行事を守るヨウニ人々はまだブンバンファイ祭りを行っている (th079j)）、タメニを使うことも可能である（古くて美しい行事を守るタメニ人々はまだブンバンファイ祭りを行っている）。

#### 4. 分析結果

この節は3つの小節に分かれる。まず対訳コーパスのタイ語訳 (th001m～th101m) から集めた**cuwj**

を含む表現の統語構造について調べる（4.1）。そして日本語作文（th001j～th101j）との対訳パターンを調べる（4.2）。さらに *cuŋ* が表す意味を考察する上で示唆的な対訳を検討する（4.3）。

タイ人学生 101 人のタイ語対訳（th001m～th101m）には 138 の *cuŋ* が含まれていた。*cuŋ* でつながられた先行節と後続節の接続関係としては、原因/理由＋結果/帰結、先行事象＋後続事象、条件＋結果、目的＋意志的行為の 4 つのタイプが認められた。それぞれの意味タイプの出現頻度は表 2 の通りである。

1、原因/理由＋結果/帰結	129	（約 93.5%）
2、先行事象＋後続事象	7	（約 5.1%）
3、条件＋結果	1	（約 0.7%）
4、目的＋意志的行為	1	（約 0.7%）

表 2：各意味タイプの対訳コーパス内の出現頻度

上の表から、原因/理由＋結果/帰結タイプが 129（全体の約 93.5%）と圧倒的多数を占めていることがわかる。先行事象＋後続事象タイプが 7（全体の約 5.1%）で次に多い。条件＋結果タイプと目的＋意志的行為タイプはそれぞれ 1（全体の約 0.7%）づつしかない。しかし、これら 4 種類の意味分類は便宜的なものであり、その境界線はあいまいであることをまず初めに断っておかなければならない。[注 15] 先行節と後続節の因果関係が特定できない場合は、話者が主観的に因果関係を認めているのだと理解し、原因/理由＋結果/帰結タイプに帰属させた。逆から言えば、先行事象＋後続事象、条件＋結果、目的＋意志的行為という因果関係の種類がはっきり特定できる場合に限りそのように分類した。特に条件と目的の関係は *cuŋ* 単独では明確に表し難く、条件や目的を表す他の形式が必要である。

4 つの意味関係に共通していることは、後続節の意味内容が先行節の意味内容のいわば「結果」である（先行節の意味内容と後続節の意味内容が非対称の因果関係にある）と捉えられ、さらにその後続節で表される結果が先行節で表される原因を背景として前景化され得るということである。すなわち、*cuŋ* で結び付けられることによって、1 は原因/理由を背景に結果/帰結が前景化され（原因/理由＋＜結果/帰結＞）、2 は先行事象を背景に後行事象が前景化され（先行事象＋＜後続事象＞）、3 は条件を背景に結果が前景化され（条件＋＜結果＞）、4 は目的を背景に意志的行為が前景化される（目的＋＜意志的行為＞）。

以下、実際の例を参照しながら、*cuŋ* の意味用法を検証していく。

#### 4.1 統語構造

この小節では 4 つの意味タイプの統語構造について詳しく見ていく。

##### 4.1.1 原因/理由＋結果/帰結

原因/理由＋結果/帰結タイプは先行節が原因/理由（あるいは前提）を表し、*cuŋ* を含む後続節がその結果/帰結を表す。その統語形式は、原因/理由を表す比較的独立性の高い、指示詞（*nán* 「その」、*níi* 「この」）を含む複合接続形式（例えば、*daŋnán*、*dúay hèt níi*、*phróchanán* 「だから、そういうわけで、

それゆえ」など) が先行節と後続節の間に現れるか否かによって大きく次の 2 つの構文パターン [注 16] に分類できる。

- 1、[ (接続形式) ~ ]<sub>1</sub> 独立接続形式 [ ( ~ ) cwɯŋ ~ ]<sub>2</sub>
- 2、[ (接続形式) ~ ]<sub>1</sub> [ ( ~ ) cwɯŋ ~ ]<sub>2</sub>

どちらの構文パターンも、先行節は原因/理由を表す独立性の低い (複合) 接続形式 (例えば、phró? ~、phró? wâa ~、núaŋ càak ~ 「~ゆえ、~ので、~から」など) によって導かれる場合もあればそうでない場合もある。また、後続節の cwɯŋ の前には主題成分があってもなくてもよい。両構文パターンの違いは先行節と後続節の接続関係、すなわち両節の自立度に見られる。daŋnán 「だから」などの独立接続形式を介して先行節とつながられた構文パターン 1 の後続節のほうが直接先行節と接続した構文パターン 2 の後続節より自立度が高い。なぜなら構文パターン 1 の独立接続形式と cwɯŋ を含む後続節は一つの完結した命題を表す節 (文) と見なされ得るからだ ([独立接続形式 (+ 主題成分) + cwɯŋ + 述語成分]<sub>2</sub>)。以下に具体例を挙げ、それぞれの統語構造を示す。(12a) は独立接続形式が先行節と後続節の間に現れる構文パターン 1 の例、(12b) は独立接続形式が現れない構文パターン 2 の例である。[注 17]

- (12a). ประเพณีดังกล่าวส่วนใหญ่จะจัดขึ้นทางภาคตะวันออกเฉียงเหนือ นั่นเป็นเพราะว่า ในทุก ๆ ปี ในช่วงตั้งแต่เดือนมษายนจนถึงช่วงเดือน พฤษภาคม จะเป็นช่วงที่แห้งแล้งมาก ดังนั้นน้ำจึงขาดแคลน (th077m)  
そういう式はだいたい東北地方に行います。なぜなら毎年四～三月にはたいへん日照りで水が不足しますから。(th077j)  
[毎年四～三月はたいへん日照りだ]<sub>1</sub> daŋnán 「だから」 [水 + cwɯŋ + 不足する]<sub>2</sub>
- b. วันพระนั้นไม่ได้มีแค่วันเดียวจึงมีโอกาที่จะกลับมาใหม่ได้ (th087m)  
仏日は一回だけではなくまたやってくる機会もあります。(th087j)  
[仏日は一回だけではない]<sub>1</sub> [cwɯŋ + またやってくる機会もある]<sub>2</sub>

#### 4.1.2. 先行事象 + 後続事象

先行事象 + 後続事象タイプは時間軸にそって連続して生起する 2 つの事象の前後関係を表す。先行節が先行する事象、cwɯŋ を含む後続節が後続する事象を表す。先行事象 + 後続事象タイプの構文は、原因/理由 + 結果/帰結タイプの構文と同じように、時・前後関係を表す比較的独立性の高い、指示詞を含む複合接続形式 (例えば、lǎŋ càak nán 「その後」など) が先行節と後続節の間に現れるか否かによって 2 つのパターンに大きく分類できる。

- 1、[ ~ ]<sub>1</sub> 独立接続形式 [ ( ~ ) cwɯŋ ~ ]<sub>2</sub>
- 2、[ (接続形式) ~ (アスペクト形式) ]<sub>1</sub> [ ( ~ ) cwɯŋ ~ ]<sub>2</sub>

独立接続形式 (lǎŋ càak nán 「その後」など) を含まない構文パターン 2 の先行節は、時・前後関係を表す独立性の低い (複合) 接続形式 (例えば、phó? ~、lǎŋ càak ~ 「~したとき、~すると、~してから、~後」など) によって導かれることのほうが多い。perfect を表すアスペクト形式 (~léəw 「~た」)

が構文パターン2の先行節の最後に現れることもある。いずれの構文も、後続節の **cuwŋ** の前には主題成分が現れたり現れなかったりする。独立接続形式を含む構文パターン1の例を(13a)に、含まない構文パターン2の例を(13b)に挙げる。

- (13)a. ฉันคิดว่าสิ่งที่ฉันพูดไปดูเหมือนไม่มีประโยชน์อะไรเลย **หลังจากนั้น** ฉันจึงไม่คุยเรื่องเกี่ยวกับบุหรี่ปอกอีก (th055m)  
その時私が言ったことはくだらないそうだと思います。その後、私は父にたばこについて話  
しませんでした。(th055j)  
[私が言ったことはくだらないように思った]<sub>1</sub> **lǎŋ càak nán** 「その後」  
[私 + **cuwŋ** + 父にたばこについて話さなかった]<sub>2</sub>
- b. หลังจากที่เจ้าบ่าวเข้าบ้านได้แล้ว จึงไปหาเจ้าสาว (th072m)  
新郎は家に入れてから新婦のところに行きます。(th072j)  
[**lǎŋ càak** 「～後」 + 新郎は家に入れる + **lɛ̀w** 「～た」]<sub>1</sub> [**cuwŋ** + 新婦のところに行く]<sub>2</sub>

#### 4.1.3. 条件+結果

条件+結果タイプは先行節が条件を表し、**cuwŋ**を含む後続節がその結果を表す。原因/理由+結果/帰結タイプや先行事象+後続事象タイプの構文と異なり、条件+結果タイプの構文には条件を表す独立接続形式(例えば、**thâa kranán**、**thâa chên nán**、**ŋán**「そうなら、それじゃあ」など)は含まれない。また、先続節の頭には条件を表す独立性の低い接続形式(**thâa**～「～たら、～れば」)が置かれることが多い。したがって、条件+結果タイプは原因/理由+結果/帰結タイプや先行事象+後続事象タイプより先行節と後続節の相互依存度が高いと言えよう。条件+結果タイプの構文パターンは次の通りである。

[接続形式～]<sub>1</sub> [ (～) **cuwŋ** ～ ]<sub>2</sub>

対訳コーパスに含まれていた条件+結果タイプは(14)の一例のみだった。

- (14) เจ้าบ่าวจะต้องแสดงทรัพย์สินที่นำมาให้พ่อแม่ของเจ้าสาวดูเสียก่อน **ถ้าถูกต้องและครบจำนวน** พิธีจึงดำเนินต่อไปได้ (th034m)  
花婿は花嫁の両親に持っている財産を表す。正しくて揃いたら、式が続く。(th034j)  
[**thâa** 「～たら」 + 正しくて揃っている]<sub>1</sub> [式 + **cuwŋ** + 続く]<sub>2</sub>

#### 4.1.4. 目的+意志的行為

目的+意志的行為タイプは先行節が目的を表し、**cuwŋ**を含む後行節がその目的に達するための意志的行為を表す。条件+結果タイプと同様、目的+意志的行為タイプの先行節と後続節の間には目的を表す独立接続形式が現れることはない。さらに、目的+意志的行為タイプの先行節は必ず目的を表す独立性の低い接続形式(**phûa**～「～ために、～ように」)で導かれる。したがって、目的+意志的行為タイプは条件+結果タイプよりさらに先行節と後続節の相互依存度が高いといえる。下に示すように、目的+意志的行為タイプの構文パターンは条件+結果タイプの構文パターンと同じである。

[接続形式～]<sub>1</sub> [ (～) **cuwŋ** ～ ]<sub>2</sub>



もっとも高いからであろう。我々が何かの行為を意志的に行う際には必ず目的がある、逆から言えば、目的のない行為は単なる行為であって意志的行為にはなり得ない、ということである。

#### 4.2. 日本語対訳との対照

この小節では、各意味タイプごとに、タイ語の **cuŋ** を含む表現とその日本語対応部分との対応パターンを示す。なお、明らかに語彙選択を誤ったのであろうと思われる例が数例あったが (例えば「だから」などの結果を表す接続形式を使うべきところに原因を表す接続形式「なぜならば」を使っている例など)、それは除外した。

##### 4.2.1. 原因/理由+結果/帰結

原因/理由+結果/帰結タイプには以下のような対応パターンがあった。

- |    |       |                                       |
|----|-------|---------------------------------------|
| 1、 | タイ語 : | 非独立 (複合) 接続形式 + 独立複合接続形式 + <b>cuŋ</b> |
|    | 日本語 : | 独立複合接続形式「それで」(16a)                    |
|    |       | 非独立接続形式「~から」(16b)                     |

##### (16)a. เพราะคิดว่าเป็นเรื่องของเพียงแค่ 2 คน ดังนั้น จึงอยู่ด้วยกันโดยไม่ได้แต่งงาน (th076m)

二人だけのことを考えます。それで、結婚しないで一緒に生活する人が増えて行きます。  
(th076j)

[phró? 「~から」 + 二人だけのことを考える]<sub>1</sub> **daŋnán** 「だから」

[**cuŋ** + 結婚しないで一緒に生活する]<sub>2</sub>

##### b. เนื่องจาก ช่วงเดือน 12 ตามปฏิทินจันทรคติ น้ำในแม่น้ำจะมากที่สุดในรอบปี ดังนั้น เทศกาลลอยกระทง จึงถูกจัดขึ้นในคืนวันเพ็ญ เดือน 12 ของทุกปี (th081m)

陰暦 12 月頃、川の水は一年中で一番多くなるから、ローイカトン祭りは毎年その 12 月の満月の夜に行われることになっています。(th081j)

[**núaŋ càek** 「~から」 + 陰暦 12 月頃、川の水は一年中で一番多くなる]<sub>1</sub>

**daŋnán** 「だから」 [ローイカトン祭り + **cuŋ** + 毎年 12 月の満月の夜に行われる]<sub>2</sub>

- |    |       |  |
|----|-------|--|
| 2、 | タイ語 : | 独立複合接続形式 + <b>cuŋ</b>  |
|    | 日本語 : | 独立複合接続形式「だから、それで、そこで、ですから、そんな訳で、そういう訳で、という訳で、このため、そのため、そのために」(17a) |
|    |       | 非独立接続形式「~から、~ので」(17b)  |

##### (17)a. ไม่ว่าจะเป็นประเทศไทย เด็กคือสิ่งที่สวยงาม ดังนั้น จึงให้ความสำคัญแก่เด็ก สร้างวันเด็กขึ้นมา จัดการละเล่นต่าง ๆ เพื่อเด็ก ๆ (th090m)

どの国にとっても子供は美しいものです。ですから、子供を重視して子供の日を作って子供のために色々な遊びをします。(th090j)

[どの国にとっても子供は美しいものだ]<sub>1</sub> **daɲnán** 「だから」

[**cwɯŋ** + 子供を重視して子供の日を作って子供のために色々な遊びをする]<sub>2</sub>

b. ประเทศไทยเป็นประเทศเก่าแก่ ตั้งนั้น จึงมีวัฒนธรรมประเพณีมากมาย (th036m)

タイはふるい国ですから、伝統がたくさんあります。(th036j)

[タイは古い国だ]<sub>1</sub> **daɲnán** 「だから」 [**cwɯŋ** + 伝統がたくさんある]<sub>2</sub>

3、 タイ語: 非独立接続形式 + **cwɯŋ**

日本語: 非独立接続形式「～から、～ので」(18)

(18) เพราะ ฉันโตเป็นผู้ใหญ่แล้ว ฉันจึงอยากสูบบุหรี่ (th055m)

私は大人になったから、たばこを吸いたい。(th055j)

[**phróʔ** 「～から」 + 私は大人になった]<sub>1</sub> [私 + **cwɯŋ** + たばこを吸いたい]<sub>2</sub>

4、 タイ語: **cwɯŋ**

日本語: 独立複合接続形式「だから、それで」(19a)

非独立接続形式「～から、～ので」(19b)

動詞連用形(19c)

並列文(19d)

(19)a. ต่อมาชาวบ้านมาเจอเงินทองนี้ แต่เอาใช้ไม่ได้ จึงนำมาสร้างพระพุทธรูปแทนนี้ (th032m)

土地の人は金銀を見ましたが、とって使えませんでした。それで、その金銀で大仏像をつくったと言われてしています。(th032j)

[土地の人は金銀を見たが、とって使えなかった]<sub>1</sub> [**cwɯŋ** + その金銀で大仏像をつくった]<sub>2</sub>

b. ปีใหม่ของไทยมีวันหยุดติดต่อกันหลายวัน พวกคนที่ออกไปทำงานต่างถิ่นเหล่านั้น จึงกลับบ้าน (th008m)

タイのお正月はながいあいだ休みますから、その出稼ぎの人達はふるさとに帰ります。

(th008j)

[タイのお正月は長いあいだ休む]<sub>1</sub> [その出稼ぎの人達 + **cwɯŋ** + ふるさとに帰る]<sub>2</sub>

c. ตอนที่ข้าพเจ้าอยู่ชั้นมัธยมปลาย ข้าพเจ้าคิดจะเค้(เครื่องดนตรีไทย) ข้าพเจ้ากับเพื่อนจึงได้รับเชิญจากเจ้าภาพให้ไปแสดงบ่อยๆ

(th035m)

校高生の時、私はチャケー (タイクラシックの楽器) を弾き、いつも私は友達と主催から招いています。(th035j)

[高校生の時、私はチャケー (タイクラシックの楽器) を弾いた]<sub>1</sub>

[私と友達 + **cwɯŋ** + いつも主催者から招かれていた]<sub>2</sub>

d. แต่ว่าฉันเห็นด้วยกับการที่ถิ่นเราสามารถที่จะทำเรื่องของตัวเองอยากจะทำได้ จึงคิดว่าใครก็ตามมีสิทธิในการสูบบุหรี่ (th062m)

しかし、私は自分がしたいことができるのに対して賛成します。だれにもたばこを吸う権利があるはずだと思います。(th062j)

[私はだれでも自分がしたいことができるということに賛成だ]<sub>1</sub>

[**cwɯŋ** + だれにもたばこを吸う権利があると思う]<sub>2</sub>

#### 4.2.2. 先行事象+後続事象

先行事象+後続事象タイプには以下のような対応パターンがあった。

- 1、 タイ語: 独立複合接続形式+cuŋ  
日本語: 独立複合接続形式「その後」(20)=(13a)
- (20) ถัดมาสิ่งที่ฉันพูดไปดูเหมือนไม่มีประโยชน์อะไรเลย หลังจากนั้น ฉันจึงไม่คุยเรื่องเกี่ยวกับบุหรี่กับพ่ออีก (th055m)  
その時私が言ったことはくだらないそうだと思います。その後、私は父にたばこについて話  
しませんでした。(th055j)  
[私が言ったことはくだらないように思った]<sub>1</sub> lǎŋ cəək nán 「その後」  
[私 + cuŋ + 父にたばこについて話さなかった]<sub>2</sub>
- 2、 タイ語: 非独立複合接続形式+cuŋ  
日本語: 非独立複合接続形式「～てから、～後で」(21)
- (21) แต่ถ้ายากสูบบุหรี่ก็ต้องหลังจากที่ลงไปแล้ว จึงค่อยสูบบุหรี่ได้ (th004m)  
吸いたければ、降りた後で吸ってもいいです。(th004j)  
[lǎŋ cəək 「～後」 + 降りる + léew 「～た」]<sub>1</sub> [cuŋ + 吸う]<sub>2</sub>
- 3、 タイ語: 非独立接続形式+cuŋ  
日本語: 非独立(複合)接続形式「～た時に、～と」(22)
- (22) พอมีคนตายจากการสูบบุหรี่มากขึ้นเรื่อยๆ จึงได้หาหนทางแก้ไขปัญหากันภายหลัง (th066m)  
たばこを吸うによって死者が多くなると、問題を解き方をさがします。(th066j)  
[phəw 「～したとき」 + たばこを吸うことによって死者が多くなる]<sub>1</sub>  
[cuŋ + 問題の解き方をさがす]<sub>2</sub>
- 4、 タイ語: cuŋ  
日本語: 非独立接続形式「～て」(23)
- (23) ก่อนที่จะล่อน้ำก็จะสวมชุดเขาแห่งแม่น้ำแล้ว จึงนำกระทงลอยในแม่น้ำ (th064m)  
流れる前に川の神様に祈ってグラトンを川に流れます。(th064j)  
[流す前に川の神様に祈る + léew 「～た」]<sub>1</sub> [cuŋ + グラトンを川に流す]<sub>2</sub>

#### 4.2.3. 条件+結果

条件+結果タイプの例は1つしか対訳コーパスに含まれていなかったなので、対応パターンは次の1つしかない。

タイ語: 非独立接続形式 + **cuŋ**  
日本語: 非独立接続形式「～たら」(24)=(14)

- (24) เจ้าบ่าวจะต้องแสดงทรัพย์สินที่นำมาให้พ่อแม่ของเจ้าสาวดูเสียก่อน ถูกต้อง และครบจำนวน พิธีจึงดำเนินต่อไปได้ (th034m)  
花婿は花嫁の両親に持っている財産を表す。正しくて揃いたら、式が続く。(th034j)  
[thâa 「～たら」 + 正しくて揃っている]<sub>1</sub> [式 + **cuŋ** + 続く]<sub>2</sub>

#### 4.2.4. 目的+意志的行為

目的+意志的行為タイプの例も 1 つしか対訳コーパスに含まれていなかったの、対応パターンは次の 1 つしかない。

タイ語: 非独立接続形式 + **cuŋ**  
日本語: 非独立接続形式「～ように」(25)=(15)

- (25) แล้วในปัจจุบันถึงแม้ว่าคนไทยจะรู้ว่าไม่มีเทวดา และเทวดาก็ไม่ได้เป็นคนสั่งให้ฝนตก แต่เพื่อเป็นการอนุรักษ์วัฒนธรรมที่เก่าแก่และสวยงามไว้ จึงยังจัดงานนี้ขึ้นมา (th079m)  
現在タイ人は天使がなくて、天使が雨を降らせる人ではないのを知っていても、古くて美しい行事を守るように、人々はまだブンバンファイ祭りを行っているでしょう。(th079j)  
[phuâa 「～ために」 + 古くて美しい行事を守ることだ]<sub>1</sub>  
[**cuŋ** + まだブンバンファイ祭りを行っている]<sub>2</sub>

#### 4.2.5. 対訳パタンのまとめ

以上見てきた対訳パターンについて以下にまとめる。まず形式について。第一に、独立複合接続形式 (daŋ nán 「だから」、lǎŋ càak nán 「その後」など) が使われているタイ語表現の日本語対応部分には、非独立接続形式 (「～から」、「～してから」など) が使われることもあるが、独立複合接続形式 (「だから」、「その後」など) が使われることのほうが多い。

第二に、非独立接続形式 (phróp 「～から、～ので」、núaŋ càak 「～により」、lǎŋ càak 「～後」、phoo 「～のときに、～と」、thâa 「～たら、～れば」、phuâa 「～ために、～ように」など) が使われているタイ語表現の日本語対応部分には、独立接続形式ではなく、非独立接続形式が使われる。

第三に、接続形式を伴わず **cuŋ** だけで 2 つの節が結び付けられている場合 (そのほとんどは原因/理由 + 結果/帰結タイプ)、その日本語の対応表現はさまざまである。多くは接続形式が使われる。(3.4) で述べた通り「～から」と「～ので」の意味には違いがあるが、**cuŋ** はそのどちらの意味とも矛盾しないことが対訳コーパスの多数の用例から見てとれる。**cuŋ** が表す「図式的な因果関係」という意味は「～から」や「～ので」が表す因果関係の意味より抽象的である証拠だ。その他、動詞連用形が使われたり、単純な並列文になることもある。日本語には **cuŋ** と同じ意味機能を持つ単語がないので、**cuŋ** で表現される抽象的、図式的因果関係の意味を日本語で伝えようとする、まずその因果関係を具体的に解釈してその関係を表し得る日本語の接続形式を添え必要以上に明示的に表現するか、あるいはその因果関係

の種類を明確化せず動詞の連用形を使ったり単なる並列文にしたりして暗示的に表現するか、そのどちらかを選択することになる。

次に意味タイプについて。第一に、日本語にしるタイ語にしる、条件や目的が関与する因果関係 (すなわち条件+結果タイプと目的+意志的行為タイプ) を単なる並列文や動詞連用形で表すことは難しく、普通は条件や目的を表す接続形式が使われる。タイ語では、(14)=(24), (15)=(25)のように、条件に結び付いた「結果」や目的に結び付いた「意志的行為」を表す後続節に *cuŋ* が添えられ結果の意味が前景化され得るが、その *cuŋ* の意味を日本語に訳すことはとても難しい。対訳コーパスの日本語対応部分ではそうした *cuŋ* のニュアンスは無視されている。ある条件に結び付いた結果を強調したいなら「～してそれでやっとなら」、ある目的に結び付いた意志的行為を強調したいなら「～ために～のだ」と訳すことになろうか。しかし少々大袈裟である。また、条件や目的を表す日本語の接続形式は「～れば、～なら、～たら、～と」や「～ように、～ために」のように複数存在し、その意味の違いは (3.4) で述べた通りだが、*cuŋ* はそのいずれの意味とも矛盾しないようである。[注 19] もしそうであるとすれば、*cuŋ* の表す因果関係の意味はこれらの接続形式の意味すべてと矛盾しないほど抽象的であるといえる。

第二に、接続形式を使わず *cuŋ* だけで結び付けられた原因/理由+結果/帰結タイプと先行事象+後続事象タイプ (特に前者) の日本語対応部分は並列文になっている場合がある ((19d) など)。しかしタイ語でも日本語でも並列では (26) のように原因/理由+結果/帰結タイプか先行事象+後続事象タイプかははっきりしないことがある。

- (26)   นอกจากนี้ยังมีบางคนนำน้ำคลองสกปรกมาเล่น คนที่ถูกสาธุจึงได้รับความเดือดร้อน (th008m)  
それに、ある人は汚い水を使います。その汚い水をかけられる人がこまります。(th008j)  
[ある人は汚い水を使う]<sub>1</sub> [汚い水をかけられる人 + *cuŋ* + こまる]<sub>2</sub>

どちらのタイプであっても先行節と後続節の間に意味的な非対称性 (原因と結果) があればよいのだが、(19d) や (26) の日本語表現からわかるように、並列文ではその非対称性をはっきりと表せない。

第三に、動詞連用形の場合もその日本語対応表現は (27a) (= (19c)), (12b) などの原因/理由+結果/帰結タイプあるいは (27b) などの先行事象+後続事象タイプのいずれかだった。

- (27)a.   ตอนที่ข้าพเจ้าอยู่ชั้นมัธยมปลาย ข้าพเจ้าดีดจะเค้(เครื่องดนตรีไทย) ข้าพเจ้ากับเพื่อนจึงได้รับเชิญจากเจ้าภาพให้ไปแสดงบ่อยๆ  
(th035m)  
校高生の時、私はチャケー (タイクラシックの楽器) を弾き、いつも私は友達と主催から招いています。(th035j)  
[高校生の時、私はチャケー (タイクラシックの楽器) を弾いた]<sub>1</sub>  
[私と友達 + *cuŋ* + いつも主催者から招かれていた]<sub>2</sub>
- b.       ดิฉันทราบมาจากการเรียนว่าที่อินเดีย พอถึงวันสิ้นสุดฤดูใบไม้ผลิอากาศจะร้อนขึ้นจึงมีเทศกาลเฉลิมฉลองขึ้น (th071m)  
テキストによると、インドは春分の日を境に気候が暑くなり、それのお祝いをするそうです。  
(th071j)  
[インドは春分の日を境に気候が暑くなる]<sub>1</sub> [*cuŋ* + それのお祝いをする]<sub>2</sub>

しかし、並列文同様、動詞連用形では因果関係がはっきりしない。原因/理由+結果/帰結タイプの場合は原因/理由を明示する「～から、～ので、だから」などを使い、先行事象+後続事象タイプの場合は継起関係を明示する「～と、すると」などを使ったほうが接続関係がはっきりしてよいだろう。例えば、(27a)は「高校生の時、私はチャケを弾いた。だから、私と友達はいつも主催者から招かれた」、(27b)は「インドは春分の日を境に気候が暑くなる。すると、それのお祝いをする」のほうがよいだろう。

第四に、「～て」表現も、並列文や動詞連用形表現と同様、その日本語対応表現は(28a)=(12a)などの原因/理由+結果/帰結タイプか、(28b)=(23)などの先行事象+後続事象タイプかのどちらかだった。

(28)a. ประเพณีดังกล่าวส่วนใหญ่จะจัดขึ้นทางภาคตะวันออกเฉียงเหนือ นั้นเป็นเพราะว่าในทุก ๆ ปี ในช่วงตั้งแต่เดือนเมษายนจนถึงช่วงเดือน พฤษภาคม จะเป็นช่วงที่แห้งแล้งมาก ดังนั้นน้ำจึงขาดแคลน (th077m)

そういう式はだいたい東北地方に行います。なぜなら毎年四～三月にはたいへん日照りで水が不足しますから。(th077j)

[毎年四～三月はたいへん日照りだ]<sub>1</sub> danán 「だから」 [水 + cuŋ + 不足する]<sub>2</sub>

b. ก่อนที่จะล่อน้ำก็จะสวดบูชาเทพเจ้าแห่งแม่น้ำแล้ว จึงนำกระทงลอยในแม่น้ำ (th064m)

流れる前に川の神様に祈ってグラトンを川に流れます。(th064j)

[流す前に川の神様に祈る + léew 「～た」]<sub>1</sub> [cuŋ + グラトンを川に流す]<sub>2</sub>

(28a)のような原因/理由+結果/帰結タイプの場合は「～て」を使って無理なくその因果関係を表わせるが、(28b)=(23)のような先行事象+後続事象タイプの場合は「～て」ではなく「～てから」を使ったほうがよい。例えば(28b)=(23)は「川の神様に祈ってからグラトンを川に流す」のほうがよいだろう。Hasegawa (1996) の指摘通り、「～て」は時間的継起関係の意味を本来的に表す接続形式ではないからだろう。

#### 4.3 示唆的な対訳

この小節では、cuŋの意味機能を考える上で示唆に富む対訳を特に取り上げ検討を加える。まず、(29)の2つの対訳例を見てほしい。

(29)a. เนื่องจากในสมัยก่อนนั้นสำหรับคนไทยแล้ว แม่น้ำนั้นสำคัญมาก จึงมีการเฉลิมฉลองกันทั่วประเทศ (th092m)

昔、タイにとって川はとても大切からです。この行事は全国で祝います。(th092j)

[nuŋaŋ cæk 「～から」 + 昔、タイ人にとって川はとても大切だった]<sub>1</sub>

[cuŋ + 全国にこの行事がある]<sub>2</sub>

b. คนที่สูบบุหรี่ในสถานที่ที่ห้ามสูบบุหรี่ เช่น โรงเรียน โรงพยาบาล ร้านอาหาร เพราะจะทำให้คนอื่นเขาเดือดร้อนตลอดเวลา คนประเภทนี้จึงถูกรังเกียจราวกับเป็นโรงงานปล่อยควันพิษเคลื่อนที่ (th100m)

他人をいつもずっと困らせるので、バスやレストラン、映画館や学校など公共のたばこを吸わせない。たばこを吸う人は「煙害を噴出する移動工場」のようにきらわれる。(th100j)

[phró? wâa 「～から」 + 他人をいつも困らせる]<sub>1</sub>

[このような人 + cuŋ + 「煙害を噴出する移動工場」のようにきらわれる]<sub>2</sub>

(29a)の意味をとると「昔、タイ人にとって川はとても大切だったから、全国にこの行事がある」となる。(29b)の意味をとると「(バスやレストラン、映画館や学校など公共のたばこを吸わせない場所でたばこを吸う人は) 他人をいつも困らせるので、このような人は「煙害を噴出する移動工場」のようにきらわれる」となる。しかし対訳コーパスの日本語表現はどちらも先行節と後続節を変に区切って無理に並列文にしており、つながり具合がおかしな文章である。特に(29b)は言いたかったこととはかなり違う内容になってしまっている。これはcuwꞓを含む後続節の自立度の高さを傍証しているのではないかと筆者は考える。つまり、「全国にこの行事がある」、「このような人 (バスやレストラン、映画館や学校など公共のたばこを吸わせない場所でたばこを吸う人) は「煙害を噴出する移動工場」のようにきらわれる」というcuwꞓで前景化された結果事象あるいは判断は、単文で表現したくなるような意味的な独立性を持っていると考えられるのではないか。もちろん先行節で表される原因事象に結び付いた結果事象ではあるのだが、そしてだからこそどちらの書き手も「～から、～ので」という因果関係を表す形式を使ってはいるのだが、その結果事象は書き手が推論の過程を経て得られた独立性の高い結論であるといってもよいであろう。

次に、(30)の対訳の不整合について検討する。

(30) ส่วนคำว่า“บัง” ก็คือไม้ไผ่ ดังนั้นคำตัวของบังไฟจึงทำด้วยไม้ไผ่ยาวๆ (th079m)

バンというのは竹のことです。つまり、バンファイの機体は長い竹で作られています。

(th079j)

[バンというのは竹のことだ]<sub>1</sub> dangnán 「だから」

[バンファイの機体 + cuwꞓ + 長い竹で作られている]<sub>2</sub>

(30)を直訳すると「バンというのは竹のことだ。だからバンファイの機体は長い竹でつくられている」となる。しかし(30)の日本語表現は「バンというのは竹のことだ。つまり、バンファイの機体は長い竹でつくられている」というものである。推論を経た結論あるいは要約を標示する「つまり」が使われている。随分と飛躍した論理ではあるが、納得できないことはない。書き手は次のように考えたのかもしれない。「バンというのは竹のことだ」という前提があれば「バンファイの機体が長い竹でつくられている」ということの説明がつく、と。つまり、バンファイの機体が長い竹でつくられているということはバンという言葉が竹を意味するという事実と何らかのつながりがあるのである。cuwꞓはある原因事象に結び付いた結果事象を提示するとはいえ、その原因事象と結果事象との間に認められる関連性は必ずしも万人にとって納得のいくようなものでなくともよいのだろう。

最後に、(31)の先行節と後続節の接続関係について考えてみたい。

(31) (คนไทยส่วนใหญ่ในสมัยก่อนนั้นเป็นเกษตรกร หลังฤดูเก็บเกี่ยวจะว่างไปจนถึงฤดูฝน เทศกาลสงกรานต์ก็เข้ากับวิถีชีวิตของคนไทยเป็นอย่างดี) 13-15 เมษายนนี้ ผู้คนจึงพากันรดน้ำซึ่งกันและกัน (th071m)

(昔タイの大半が農民で、収穫期の後、雨季まで暇だったからソンクラーンはタイの生活習慣に合いました。)13～15日に人々がお互い水をかけます。(th071j)

[4月13～15日]<sub>1</sub> [人々 + cuwꞓ + 水をかけ合う]<sub>2</sub>

タイ語訳を見ると、「(4月) 13~15日に人々が水をかけ合う」という表現より「4月 13~15日になると人々は水をかけ合う」という表現にしたほうがよいのではないかと思う。(31)の先行節は「4月 13~15日」を表す名詞だけを含み、動詞述語を含まないのに節と見なし得るのかと訝る人がいるかもしれない。だが、**cuŋ**を含む節の前に置かれた特定の時を表す名詞は、一般に、断定、変化、到来を表す動詞(「だ、なる、いたる」など)を伴わなくても「その時になる」という1つの命題を表すことができるので筆者は節と呼ぶ。[注20]しかし(31)の例で筆者が問題にしたいのは統語単位の認定についてではなく意味タイプの認定についてである。(31)は先行事象+後続事象タイプの「4月 13~15日になったときに(確定条件)人々は水をかけ合う」という意味なのか、それとも条件+結果タイプの「4月 13~15日になったら(仮定条件)人々は水をかけ合う」という意味なのか、ということである。どちらでも解釈可能のように思われる。条件が実際に生起するかしないか、確定条件か仮定条件か、という区別は**cuŋ**の使用に影響しないといえる。**cuŋ**が表す図式的な因果関係はそうした命題の現実性に関する区別(*realis vs. irrealis*)を捨象できるほどに抽象的な意味なのである。

## 5. まとめ

**cuŋ**の機能は、言語使用者の心的空間の中に非対称な因果関係の図式をつくること、そして「何らかの原因/理由に結び付いた結果/帰結」という性格を持つ命題を言語的に標示することである。そうした図式的因果関係と矛盾しない時間関係、条件関係、目的関係であれば、「先行事象に結び付いた後続事象」、「条件に結び付いた結果」、「目的に結び付いた意志的行為」という命題も**cuŋ**によって標示され得る。対訳コーパスの**cuŋ**を含む表現とその日本語作文対応部分を対照して明らかになったことは、それら**cuŋ**が標示する結果は先行節で表される原因と直接的に結び付くとは限らない(往々にして複雑な思考過程を経て辿り着いた)話し手/書き手の結論であり、意味的にかかなり自立度の高い命題であるということ、そして、**cuŋ**が関与する因果関係の図式は非常に抽象的で、命題の現実性と非現実性の区別すらしばしば無効にしてしまうということである。

**cuŋ**は先行節で表された命題事象から話し手/書き手がひきだした結果を表す。話し手/書き手は聞き手/読み手の持つ知識や情報を考慮して**cuŋ**を使うのではなく、あくまでも自らの論理を整理し因果関係を構築するために**cuŋ**を使うのである。つまり**cuŋ**は専ら論理関係に関与する機能語である。しかし、因果関係という論理関係は言語表現自体に内在する意味ではなく、第1節で述べた通り、話し手/書き手の関連付けによって構築されるものである。したがって**cuŋ**の使用制約はそうした語用論的要素によって規定されることを強調しておきたい。

**cuŋ**は節中の特定の位置(述語成分の直前)に生起しなければならないという統語的制約を持ち(そうした制約をほとんど持たない一般の副詞と比べると)文法性が高い。**cuŋ**を含む表現は、片方の節が必ず *margin* でなければならない *hypotaxis* ほど文法構文らしい文法構文ではないが、それでもタイ語の中で確立された文法構文であるといつてよいだろう。タイ語は動詞連続構文によって時系列にそった事象をその生起順序通りに言語化する傾向を持ち、結果構文[注21]が発達している。そしてタイ語には節レベルの時間的継起関係を表わす結果構文だけではなく、ディスコース・レベルの論理関係を表わす結果構文もある、というのが本稿の主張である。それがすなわち**cuŋ**構文である。**cuŋ**構文は論理の流れにそうように因果関係を表現し、その結果の部分話し手/書き手の(外界知覚だけでなくさらに)認識や推論を経た結論として前景化する構文だといえよう。

ここで、Kessakul and Methapisit (2000) がタイ語の結果構文の考察の中で言及した con [注 2 2] の意味機能と cuŋ の意味機能の類似性を指摘したい。Kessakul and Methapisit は結果構文の第 1 動詞と第 2 動詞の間に生起する con [注 2 3] を transition marker と定義し、その機能は「第 1 動詞で表される活動 (第 1 名詞で表されるものによる活動) が第 2 動詞で表される状態 (第 2 名詞で表されるものの状態変化) に至るまでの時間の経過」を標示することであると説明する。したがって一瞬のうちに起こる状態変化 [注 2 4] を表す結果構文に con が生起することはない。con はその聞き手/読み手が外界の複雑な事象 (ある活動の継続とそれによって最終的に引き起こされる結果) を知覚することを助ける言語的な道具なのだ と Kessakul and Methapisit は述べる。つまり、実際には長い時間を隔てた非連続な活動と状態であるかもしれないが、どんなに時間がかかろうが、どんな経過を経ようが、その状態がその活動の結果として生起した最終的状态であると我々が認識さえすれば、それらはひとつの複雑かつまとまりのある事象として con を含む結果構文の形で言語化できるということであろう。このように con を含む表現が「ある時間経過を伴う原因・結果の関係に立つ外界事象に関与する結果構文」であるとするれば、cuŋ を含む表現は「ある時間経過を伴う原因・結果の関係に立つ論理要素に関与する結果構文」と考えられるのではないか。con が時間的推移 (経過) マーカーであるとするれば、cuŋ は論理的推移 (推論) マーカーであると定義できるのではないか。これらの仮説の検討は別稿に譲ることにする。

cuŋ のような抽象的意味を表す語の意味機能を探るには大規模なコーパスデータを活用したディスコース分析が必要だろう。cuŋ と対比し得るその他の抽象的意味を表す語についても今後ディスコース分析を続け、そうした語の意味体系を明らかにしたいと思っている。対訳コーパスの規模拡大に期待したい。

#### <注>

[1] 以下、「対訳コーパス」の略称を使う。

[2] タイ学士院の辞書 (1982: 233) は cuŋ および cuŋ を「後の行為を表す接続詞、あるいは前の出来事に起因する結果を表す接続詞」であるとする。富田 (1990: 475) もタイ学士院の辞書に準じ cuŋ および cuŋ は「後の動作を前につなぐ又は前の結果を示す接続詞」であるとし、「それで、そこで」という日本語訳を与えている。

[3] 本稿は 2000 年 12 月 14~15 日に国立国語研究所で開かれた第 8 回国立国語研究所国際シンポジウム「日本語とアジア諸言語との作文対訳コーパス：対照言語学・日本語教育への応用」の第 2 部「データベースによる対照言語学的研究」で発表した内容を拡充しまとめたものである。

[4] なお、本稿でデータとして使った対訳コーパスには cuŋ は含まれていなかった。

[5] 訳は筆者。

[6] 訳は安藤、その他 (1997: 313)。

[7] 訳は河上 (1996: 185)。

[8] 逐語訳の部分は筆者が加えた。

[9] 情報とは会話者の心の中に形づくられる心的表象だ (Lambrecht 1994: 43) という考えに筆者も賛成する。

[10] 「新情報」は、聞き手/読み手にとってその前の文脈から復元不可能な情報。

[11] 「旧情報」は、聞き手/読み手にとってその前の文脈から復元可能な情報。

[1 2] 対訳コーパスの(th067m)にあった表現である。

[1 3] 大堀 (1998: 67) は *cosubordination* を「連位接続」と訳している。*cosubordination* の先行節の法や時制は後続節の法や時制に依存することから、Van Valin (1984: 550) は *cosubordination* の統語的結合度は *subordination* より高いとする。

[1 4] Hasegawa (1996) によると、日本語の「～て」は *cosubordination* の意味を表し得る接続形式である。例えば、「タバコを吸って、新聞を読んで、テレビを見た」など。

[1 5] シンポジウムの会場でタサニー・メーターピシット氏から *cuwŋ* が関与する節接続の意味タイプの分類について示唆的なコメントをいただいた。しかしまだそれを体系化することができずにいる。今後の課題としたい。

[1 6] [ ]<sub>1</sub> は先行節、[ ]<sub>2</sub> は後続節、～は節の主題成分あるいは述語成分、( ) は節の非必須成分を表す。

[1 7] 各例文の日本語表現は対訳コーパスの日本語作文から抜き出したものであり不適切な表現や誤りを含む。しかし統語構造を検討するにあたっての不都合はさほどないのでそのまま転載する。日本語作文とタイ語対訳の比較対照は次節で行う。なお、カッコの中のコード番号は対訳コーパスに集録された日本語作文 (\*j) およびその母国語対訳 (\*m) につけられたコード番号である。

[1 8] 先に紹介した Hopper and Traugott (1993) も同様のことを述べていたのを思い出してほしい。

[1 9] 対訳コーパスには条件+結果タイプと目的+意志的行為タイプが 1 例づつしかなかったのも、この点についてはまだ結論を下すことができない。さらにこの仮説を支持する用例を集める必要がある。

[2 0] そもそもタイ語では句、節、文という統語単位は曖昧にしか定義できず、厳密な弁別基準は立てられない。そこで筆者は便宜的に 1 つの命題を表す単位を節と呼ぶ。文という単位は積極的には認めない。その必要がないからである。むしろ、テキストは単一あるいは複数の節から成り立ち、節は単一あるいは複数の句から成り立つ、と考えたほうがタイ語の実情に合っていると思う。

[2 1] 結果構文とは、(名詞を N、動詞を V で表すと) [N1 V1 N2 V2] という統語形式を持ち、「N1 が V1 の活動をすることによって N2 に影響を与え N2 は V2 の状態への変化を被る」という意味を表す文法構文である。

[2 2] 富田 (1990: 439) の訳は「～に至るまで」。

[2 3] その統語形式は、[N1 V1(他動詞) N2 con V2] あるいは [N1 V1(自動詞) con N2 V2]。

[2 4] 例えばタイ語では「立木を切って (切り倒して) その木が倒れる」などがそれに当たる。ただし、「立木を切る (切り倒す)」という動詞が瞬間動詞であるかどうかは言語によって異なり得るだろう。

#### <参考文献>

安藤貞雄、多田保行、永田龍男、中川憲、高口圭轉 (訳) . 1997. 『テキストはどのように構成されるか (Cohesion in English)』 ひつじ書房.

大堀壽夫. 1998. 「メンタル・ロジックと類型論」『月刊言語』第 27 巻第 11 号, 64-70.

河上誓作 (編) . 1996. 『認知言語学の基礎』 研究社出版.

坪本篤明. 1993. 「条件と時の連続性—一時系列と背景化の諸相」益岡隆志 (編) 『日本語の条件表現』, 99-130. くろしお出版.

寺村秀夫. 1998. 『日本語の文法 (下)』 国立国語研究所.

- 富田竹二郎. 1978. 『標準タイ語教本 1』 語学教育振興会.
- 富田竹二郎. 1990. 『タイ日辞典』 養徳社.
- 永野賢. 1951. 「カラとノデはどう違うか」 『国語と国文学』 第 29 巻第 1 号.
- ブッサバー・バンチョンマニー. 1999. 『動詞の意志性について—タイ語・日本語の対照研究をめざして』  
東京外国語大学博士論文.
- 益岡隆志. 1997. 『複文』 くろしお出版.
- 宮本マラシー. 1997. 『タイ語の言語表現』 大阪外国語大学学術研究双書 1 7.
- 森田良行. 1980. 『基礎日本語 2』 角川書店.
- Bradley, D. Beach. 1873. *Dictionary of the Siamese Language*. Bangkok: American Missionary Association Press.
- Grice, H. Paul. 1978. Further notes on logic and conversation. In Cole, Peter (ed.) *Syntax and Semantics Vol.9: Pragmatics*, 113-127. Orlando: Academic Press.
- Givón, Talmy. 1990. *Syntax: A Functional-Typological Introduction Vol.2*. Amsterdam: John Benjamins.
- Haiman, John. 1978. Conditionals are topics. *Language* 54, 564-589.
- Haiman, John. 1980. The iconicity of grammar: Isomorphism and motivation. *Language* 56, 515-540.
- Halliday, M.A.K. and Ruquaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Hasegawa, Yoko. 1996. *A Study of Japanese Clause Linkage: The Connective TE in Japanese*. Stanford: CSLI Publications & Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Horn, Laurence R. 1985. Metalinguistic negation and pragmatic ambiguity. *Language* 61.1, 121-174.
- Ishii, Yoneo, Nidhi Aewsrivongse, Osamu Akagi, Aroonrut Wichienkhiew, and Noriko Endo. 1989. *A Glossarial Index of the Sukhothai Inscriptions*. Bangkok: Amarin Publication.
- Kessakul, Ruetaivan and Tasanee Methapisit. 2000. Resultative construction in Thai and the related issues. *Proceedings of the 5th International Symposium Languages and Linguistics: Pan-Asiatic Linguistics, 16-17 November 2000*.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, Robin. 1984. The pragmatics of subordination. *Proceedings of the 10th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society (BLS 10)*, 481-492.
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Reference*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Michaelis, Laura A. 1994. Expression contravention and use ambiguity: The Vietnamese connective *cung*. *Journal of Pragmatics* 21, 1-36.

- Noss, Richard B. 1964. *Thai Reference Grammar*. Washington, D.C.: Foreign Service Institute.
- Olson, Micheal. 1981. *Barai Clause Junctures: Toward a Functional Theory of Interclausal Relations*. Ph.D. dissertation, Australian National University.
- Sweetser, Eve E. 1986. Polysemy vs. abstraction: Mutually exclusive or complementary? *BLS* 12, 528-528.
- Sweetser, Eve E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, C. Elizabeth. 1982. From propositional to textial and expressive meanings: Some semantic-pragmatic effects of grammaticalization. In Lehmann, Winfred and Yakov Malkeil (eds.) *Perspectives on Historical Linguistics*, 245-271. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, C. Elizabeth. 1988. Pragmatic strengthening and grammaticalization. *BLS* 14, 406-416.
- Traugott, C. Elizabeth. 1989. On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change. *Language* 65: 31-55.
- Traugott, C. Elizabeth and Ekkahard König. 1991. The semantics and pragmatics of grammaticalization revisited. In Traugott, C. Elizabeth and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization* Vol.1, 189-218. Amsterdam: John Benjamins.
- Van Valin, Robert D. 1984. A typology of syntactic relations in clause linkage. *BLS* 10, 542-558.
- พจนานุกรม ฉบับราชบัณฑิตยสถาน พ.ศ.๒๕๒๕ (タイ語辞書、タイ学士院、仏歴 2 5 2 5 年 (西暦 1 9 8 2 年))